甲淵〔八瀬川、高野より八瀬に至る路の傍、人家の東にあり〕千束■〔甲淵の北、半町ばかりにあり。右の方矢背川に臨んで岸高く、左は山にして道幅八尺許の坂路なり〕

〔平治物語云、比叡山には信頼義朝打まけて大原口へ落るとさたしければ、西塔の法師等これを聞て、いざやおちうど討とゞめんやとて、二三百人千束■にまちかけたり。義朝此よしを聞及び、都にてともかくもなるべき身の、鎌田が申状によつて是まで落て、山徒の手にかゝりかひなく死をせんするこそ口をしけれと宣へば。斎藤別当申けるは、こゝをば実盛とをしまいらせんとて、馬より下り兜をぬいで手にひつさげ、みだれがみを顔にふりかけ、近づきよつていひけるは。右衛門督左馬頭殿已下おもとの人々はみな大内六波羅にて討死し給ひぬ、是は諸国のかり武者どもが恥をしらず妻子を見ん為に本国に落くだり候也、討とゞめて罪つくりに何かし給はん、具足をめされんためならば物の具をばまいらせん、通して給はれと申ければ。実も大将達にてはなかりけり、葉武者はうつて何かせん、具足だにぬぎすてばとをされよかしと、せんぎしければ。実盛かさねて、衆徒は大勢おはします、我らは小ぜいなり、草ずりを切てもなほ及びがたし、投んにしたがひて奪ひとり給へといへば。おもてにすゝめる若大衆もつともしかるべしとあひあつまる。後陣の老僧も、我おとらじと一所によつてきほひあらそふ所に、実盛かぶとをがばとなげたりけり。我取らんとひしめきければ、あへて敵の勢を見つくろはざりける所に。三十二騎の兵打物をぬぎ甲のしころをかたぶけ、がばとかけ入蹴ちらしてとをりければ。大衆俄に長刀を取なをし、あますまじとて追かけければ、実盛大わらはにて、大の中ざし取てつが

ひ、敵も敵によるぞ、義朝の郎等に武蔵国の住人長井の斎藤別当実盛ぞかし、とめんと思はゞ寄や、手がらの程見せんとて取つて返せば。大衆の中に弓取は少しもなし、かなはじとやおもひけん、みな引てぞ帰りけり〕

観音石〔千束■の左の岸下より三間許にあり。自然石の面仏像を鐫、土人観音石と称す。しかれども阿弥陀仏と見へたり〕

神子淵〔観音石の北五町許にあり〕住吉石〔同じき淵のうへ、路の傍、右の方にあり、あるひは祭り石といふ〕

矢背川〔矢背の由縁前編に見ゆ〕源は大原の北二里許にて、山城近江の堺なる山城峠などいふ渓々よりしたゝりながれ出、大原を経て矢背に至る、末は高野の里を過て、糺のひがしをながれ、下鴨河合社の南にて鴨川に落合ふ。此川の流は至つて清らかにして、■■、江鮭子など、岩に触岸に添ふて早瀬を登る、これを漁せんとて茅薄を布て坐し、釣を垂、あるは小網をうちて、こゝの淵かしこの瀬をかりありきけるも多かりき。高野川には日毎に、禁裏調進の鮎を献るも、此川の名産なり。〔拾芥抄曰、垣川は左衛門府の検知にして夏鮎を供す。又侍中群要云、垣川供御所毎日鮎魚を進る云云。垣川は矢背川の一名なり〕

矢背天神宮〔同村の東の山下にあり〕祭神菅霊生土神とす、例祭は四月二日、神輿二基。〔一基は八王寺の神輿なり。諺曰、菅家御若年の時、叡山法性坊阿闍梨尊意の室に入給ひ、文書を学び給へり。筑紫左遷の後かの地にて薨じ給ひ、其神霊尊意の室に来り命じ給ふ事あり。阿闍梨の答へ、神慮に能はざるにより、其席にある柘榴を取つて妻戸に吹かけ給へば、忽ち猛火と成て燃ける。其後尊意僧正かの由縁を以て、こゝに勧請し給へり〕

紀貫之家〔小野にあるよし古今集に見へたり。八瀬の北、大原の小野歟〕

小野に住ける頃もみぢを見て

古今　秋の山もみぢをぬさと手向れば住我さへに族ごゝちする　貫之